

<論文要旨>

日本語学習者のノダの使用と習得に関する研究 — 〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉の違いを中心に—

学籍番号：9513203

氏名：范 一楠

本論文では、談話展開の方向性を聞き手に示す〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉について、日本語母語話者と学習者の使用傾向を分析した。さらに、学習者の学習環境と習熟度がノダの習得に与える影響について検討した。以下、章ごとに要約する。

第1章の序章では、日本語学習者のノダの誤用と非用に関する問題点を提示し、学習者のノダを分析するには誤用、正用、非用、自然な不使用を含むすべての発話全体を分析対象とする必要があることを示した。それを踏まえて談話展開の方向性を示す〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉について、以下の3つを本論文の目的とした。

- ① 母語話者のノダの使用傾向を明らかにする
- ② 学習者のノダの使用傾向と母語話者との違いを明らかにすると同時に、学習者の学習環境による違いを明らかにする
- ③ 学習者の日本語の習熟度によるノダの使用傾向の違いを明らかにする

第2章では、文法・談話に関する先行研究と日本語学習者の習得に関する先行研究を紹介し検討した。文法・談話に関する先行研究ではノダに関する日本語学の研究と、個別の文法項目の談話における機能に関する研究を紹介し検討した。これらの日本語学習者の習得に関する先行研究では、これまでのノダに関する習得研究と、ノダ以外の項目で学習者の認知面を考察した研究を紹介し検討した。先行研究を踏まえ、談話展開の方向性を聞き手に示す〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉の観点からの研究の、第二言語習得研究における意義を示した。

第3章では、全発話数からノダの使用率を分析するという本論文の研究方法を示した。さらに、全発話数とノダの使用率を算出する際に必要となる「文」の定義、分析の際に必要な「〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉」の分類、「トピック構造」の分類、「発話機能」の分類を示した。

第4章では、既存の雑談資料を用いて、日本語母語話者のノダの使用傾向を分析した。日本語母語話者には〈後続のノダ〉を〈承前のノダ〉より多く使用する傾向が見られることを示し、次章で学習者と比較する際の基準とした。第4章の結果は以下の3点である。

- ・ 母語話者は、先行研究において典型的とされてきたような〈承前のノダ〉よりも、雑談資料においては母語話者は〈後続のノダ〉の使用のほうが多い。
- ・ 母語話者は、〈承前のノダ〉の中では〈帰結〉の使用が最も多い。〈後続のノダ〉の中では、〈前置き〉の使用が最も多く、〈話題継続〉が続く。
- ・ 発話機能から見ると、意見提供の際のノダの使用率は、情報提供や体験提供と比べて少ない。

第5章では、既存の雑談資料を用いて、学習者と母語話者の違い、および学習環境がノダの使用傾向に与える影響を分析した。JFL (Japanese as a Foreign Language) 学習者は〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉を同程度に使用する傾向を示しているのに対し、JSL (Japanese as a Second Language) 学習者は母語話者と同様、〈後続のノダ〉を多用する傾向が見られる。

第5章の結果は、以下の4点である。

- ・ JSL 学習者はノダの使用率、正用数と非用数の比較、誤用の種類の面において、JFL 学習者よりノダの習得が進んでいる。
- ・ JFL 学習者は〈後続のノダ〉と〈承前のノダ〉の正用数に差は見られなかった。JSL 学習者は〈後続のノダ〉の正用数が多く、母語話者と類似した傾向が見られた。このことから、前の文脈に注意を向ける〈承前のノダ〉の習得のほうが〈後続のノダ〉よりやさしいと考えられる。
- ・ JFL 学習者と JSL 学習者と比べて、〈話題継続〉のノダの習得に最も差が大きい。特に情報提供と体験提供において、JSL 学習者が〈話題継続〉のノダの使用回数が多い。学習環境による可能性が考えられる。
- ・ JFL 学習者と JSL 学習者の間に差があまり見られなかったのは〈前置き〉のノダである。母語話者と比べて使用数が少ないうえ、非用も多いことから、〈前置き〉の習得には学習環境の影響が小さいと考えられる。

第6章では、既存のインタビュー資料を用いて、学習者の日本語の習熟度とノダの使用傾向との関係性を分析した。学習者はノダを使い始める時期に、直前の自分の発話や相手の認識をノダの文によって修正する例が見られる。その学習者の使用規則は、日本語の習熟度が低い段階での〈承前のノダ〉の多用と関連性があると考えられる。

第6章の結果は、以下の4点である。

- ・ 初級学習者は相手の認識を修正する際にノダを使用して誤用となる例が見られた。相手の認識を受けてそれを修正するという学習者の使用規則は、〈承前のノダ〉が先行文脈や状況を受けるという点においては共通している。〈承前のノダ〉が習得しやすいこととの関係性が考えられる。
- ・ 習熟度要因については、「単文+ノダ」→「複文節+ノダ」（「ですけど」と「ですから」）→「非事実表現+ノダ」（推量形と条件系）の順にノダの使用が見られた。人間の思考の傾向と言語処理の段階と一致している。また、誤用を含む使用状況

と正用状況を比較することにより、早い段階で使用されるが、適切に使用することが困難な形式があることがわかった。

〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉の観点：

- ・ 母語要因については、上級段階において韓国語母語話者の〈後続のノダ〉の使用が英語母語話者および中国語母語話者より高い数値を示しており、母語の影響の可能性が考えられる。
- ・ 習熟度要因については、超級段階の学習者が上級段階の学習者より〈後続のノダ〉を使用する割合が高いという結果が得られなかった。OPI のタスク設定による影響が考えられる。

第 7 章では、既存のコーパスと雑談資料を用いて、聞き手に不快感を与える危険性のあるノダの誤用と非用について分析した。具体的にはノダカラの母語話者の使用、およびソウナンデスカの母語話者の使用と学習者の非用を取り上げた。

その結果は以下の 4 点である。

ノダカラに関して、

- ・ ノダカラの後件のタイプは多岐にわたる。先行研究では「命令」、「依頼」、「意志」を表すものが多いと指摘されているが、本節における調査では最も多いのは「判断」である。数は少ないが、「事実」を表すものもあった。
- ・ 前件と後件の間の必然性は、文末モダリティ形式や語彙によって表されるが、特定の形式が現れない場合もある。

ソウナンデスカに関して、

- ・ 情報獲得の際、「推測書き換え」と「推測不明（非一般的）」の場合は「そうなんですか」を使用し、「推測保持」と「推測不明（一般的）」の場合は「そうですか」を使用することが、ソウナンデスカの日本語母語話者の基本的な使用規則である。
- ・ 基本的な使用規則から逸脱する場合として次の 2 つがある。1 つは相手が個人的な話をしている際に、その話に興味を持っていることを示すために「そうなんですか」を使用して相手のポジティブフェイスの欲求を満した場合である。もう 1 つは相手が相手自身または相手自身と同じ立場の人のマイナス面について話している際にあえて「そうですか」を使用して、相手のネガティブフェイスの侵害を避けることがある。
- ・ 日本語能力試験一級に合格した JFL 学習者の発話から、「そうですか」を使用したことで不自然となる例が多く観察でき、「そうなんですか」の使用はほとんど見られなかった。「そうなんですか」を適切に使用できるようになることで、より自然な発話になることが期待できる。

第 8 章では、独自の調査を実施し、第 4 章から第 7 章までの学習者のノダの使用規則、使用傾向と習熟度に関する仮説を質問紙調査で検証した。質問紙調査を用いて以下の結果を得た。

- ・ 日本語母語話者は〈承前のノダ〉より〈後続のノダ〉の場合にノダを選択しやすい。
- ・ JFL 学習者より JSL 学習者のほうが母語話者の使用傾向に類似しているため、学習環境がノダの習得に影響を与えることがわかった。
- ・ 中級学習者と上級学習者の間に〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉による違いは見られず、日本語の習熟度がノダの習得に与える影響は見られなかった。
- ・ 学習者のノダの使用規則については、中級学習者は意見の文にノダを選択しやすいこと、中級学習者も上級学習者も相手の認識を修正する際にノダを使用して誤用となる傾向があることがわかった。

第9章では、本論文の結論をまとめた。

本論文を通して、談話展開の方向性を聞き手に示す〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉の日本語母語話者の使用傾向が明らかとなった。談話においては従来の研究で典型的な使い方とされている〈承前のノダ〉より、非典型的な使い方とされている〈後続のノダ〉のほうが多く使用されることを指摘した。

また、日本語学習者のノダの使用規則、その使用規則が反映されるノダの使用傾向、日本語の学習環境や習熟度の影響の有無が明らかとなった。重要なのは、前の文脈への配慮が必要となる〈承前のノダ〉より、後の文脈への配慮が必要となる〈後続のノダ〉のほうの習得が困難であるとわかったことである。この結果は、学習者の中間言語のメカニズムの解明に繋がる重要なものであり、将来教育現場に活かすことが期待できる。

さらに、ノダカラとソウナンデスカのような聞き手に不快感を与える危険性のある表現に関して、教育現場で重要視すべきであることを指摘した。